



ぴらぴだより

No11. 2024. 1. 31

今年度は、10月と1月に2回も「大人のえりんこたいそう」のお誘いをいただきました。植木真理子さんをはじめとしたお母さんたちの企画に喜んで参加させていただきました。

初回の10月の時は、それまでどんぐりやまつぼっくりのお母さんには、えりんこたいそうを見学していただいたことはなかったので、実際に子ども達が行っている種目を体験して頂きました。例えば、くり・おおくりが行う無酸素運動のスピードがんばり運動。音楽教材のひとつですが、スキップや両足跳びやケンケン跳びやギャロップそして手足走りなどの動きが連続で合図され止まらないで最後まで続けることを目標とします。たった1分、されど1分、心拍数が一気に上昇します。また、器械系の運動では前転系統の運動をお座り前転から跳び箱を転がる台上前転までを段階的に子ども達が「できた！」を獲得していく感じを体験してみました。どちらも子どもの発達の特性を生かした運動プログラムなので、大人がまともに行うことはとてもキツイ運動なのですが、みなさん熱心に取り組んでくださいました。運動にも適時性がありますので、子どもの頃は難なくこなしていた運動も、重心が高くなる大人になると四つ足でスピードを出して走ることや、逆さまになり転がることなど普段あまりしない動作はとても動きづらかったと思います。毎週水曜日に活動している体育クラブ（エリンコビッチ）を見学しているくり・おおくりのお母さんからは「子ども達のすごさがわかった！子どもたちは、よくやってると思えた」との感想もありました。思いがけない発見だったかもしれません。「子どもは子どもを生きています」という好きな本があります。まさに、えりんこたいそうでも子どもたちが子どもだから楽しんでできる時間を生きれたら最高だなと思います。

2回目の1月の時は、幼児に適した運動の体験ではなくて、むしろ幼児には不向きな大人がとにかく楽しめる運動をしました。長縄での連続跳びを8の字で続けるだけでなく、色々な入口から入って跳ぶ挑戦や、両方向から同時に入るちょっとドキドキすることもしました。最初はぎこちなかった跳ぶ動作もすぐに体が勘を取り戻しどんどん上達していくのと同時に、皆さんの表情が童心に戻ったような笑顔で、キラキラしていくのがわかりました。ボールは、バレーボールやバスケットボール…などゲーム種目の道具として扱われがちですが、弾ませたり投げたり蹴ったり…色々な遊びを楽しむことができます。水曜日のエリンコビッチで小学校高学年が取り組んでいる音楽教材を使い音楽に合わせてボールと遊びました。真理子さんの熱い希望もありドッジボールもしました。意外と参加者全員が運動量も得られて作戦次第でも面白くなる誰でも楽しめる種目です。ギャーギャー言いながら楽しみました。おまけに卓球もして、2時間たっぷり汗も流すことができました。参加した皆さんは口々に「たのしかった…」

「汗をかけて気持ちがいい…」と爽快感のある笑顔で話され、運動の後の心地よさを仲間と分かち合い、私はとても嬉しい気持ちになりました。

毎週水曜日の午後、私の仲間たちがかわるがわる風越体育館にやってきます。ぴっぴにおおきいくみができただ頃から続けている体育クラブです。ただ、体育クラブなんて呼ぶ人はなく、みんなエリンコビッチと呼んでくれます。これは、現在園医をしてくださる恵美子さんがつけてくれたユニークな名前なのですが、私自身も体育なのかスポーツなのか体操なのか運動教室なのかちょっと迷い悩むような気持ちがある中で、「エリンコビッチ」という名前があるのは不思議と楽になるのです。現在くり・おおくり・小学生が2グループと、4つのグループに分かれて活動しています。活動の中では失敗したり、苦手意識をもったりすることもあり、気持ちのいいことばかりではないかもしれませんが、それでも、できた喜びを感じたり、おもいきり体を動かし運動することが、「たのしい…」、「嬉しい…」、「気持ちがいい…」、「スッキリする…」、などの爽快さに繋がることの経験はできるだけ多くあった方がいいと思うのです。それが、仲間と分かち合い共に味わえるのならばなおのこと……。

小学3年生以上の大半が所属するグループの活動でも多様な運動をしています。簡単にいうと、ボール、縄跳び、マット、跳び箱、鉄棒、ドッジボール、などなど。そんな中、長縄連続跳びでの挑戦をしました。私たちは「アイスチャレンジ」と言っていて、成功するとちょっとしたおまけ付きです。この時は、入り口4か所を順番に巡り跳んでいく世界一周という技があるのですが、それを3周、全員がノーミスでできたらチャレンジ成功ということにしました。全員という枠には3年生から6年生までのメンバーがいて、スキルもそれぞれ、体格もそれぞれで、一つの目標に向かいますが、最初はなかなかうまくつながっていきません。それでも、失敗をやじる人も責める人もなく、励まし合えるいい関係です。子ども達は失敗を重ねてはがっかりするけれど、大きいひと（上手）が小さいひと（上手くない）の後ろについてサポートできるように自分たちのアイデアで順番を変えて工夫をしたり、「前につめて」などの気づいたことを伝え、「がんばろう」や「あきらめない」などの気持ちもお互いに伝えていて、前向きなやる気を感じます。来る日も来る日も挑戦して次第に上達していく姿がありましたが、3周をクリアするのは難関で、とうとう昨年度の6年生もこれでクラブを卒業という3月の最終活動日になっていました。その日もみんなで挑戦することを決めましたが、やっぱり、なかなか…。「これでホントの最後にしよう…」と緊張感と集中力が高まったその時、大成功を果たしたのです。最後の人が跳び終えた瞬間に誰もが歓喜あふれ、あちらこちらでハイタッチをして喜び合いました。4年生のHさんが「こんなのはじめて」と私をまっすぐ見ながら目を輝かせて喜ぶ姿は、まさに何か初めての感動を味わっている瞬間だったのだと思います。そんな子ども達と喜びを分かちあっていた私自身も思いっきり幸せを感じていました。

例えばこんなふうに、チームの「できた」を喜び合ったり、時には誰か一人の「できた」を全員で喜んだり、体を動かすことからこんなに楽しさや幸福感を感じることができる…
そんな感覚を子ども達とこれからもわかちあっていきたいと思っています。 : 新井恵理

森と絵本と巡る季節

2月

森がキラキラと凍り、美しく、そして寒々しい季節となりました。あたためたい手袋や帽子がかわかせませんね。
 でも小さな子どもたちは素手でやりたいこと、感じたいことがいっぱい！ 光輝く氷や、まぶらふわの雪をてぶくろをはずしてその感触を味わっています。おともたちとしっかり手をつなぎたい！と帰りのさよならの集りの時手袋をはずしている子がいたり...♪ そうしているいろいろなシーンで子どもたちの手からはたはれるてぶくろたち、毎日、いくつものてぶくろが森の中で行方不明になっているのでしょ...。すぐにでてる時もあれば、いつのまにか、森のどこかへ... ということ。今月の絵本は「あかいてぶくろ」 林木林・文岡田千晶 絵(小峰書店)をご紹介します。



お話の中にも
でてるリスの足跡

雪の上では
足跡がまるで
チョコのように
かわいらしく
つぎます。

雪がツモツモらせば
びっぴの森でも
みられるので
探してみようね!

手が寒について、
そのあと後足がびびん!
ととびこえます
そんな姿を想像するのも
楽しいなりまよよね!



「ちいさな あかいてぶくろ

みぎとひだりには いつもいっしょにでかけます

ちびちゃんのをぶくろふんわり つつみながら...

(中略) ちいさなてが つめたくないよに

あかいてぶくろをあげようね あかいてぶくろ そのさきもね

てぶくろたちは まいばん ストーブのそばにならんでやくそくのてぶくろ

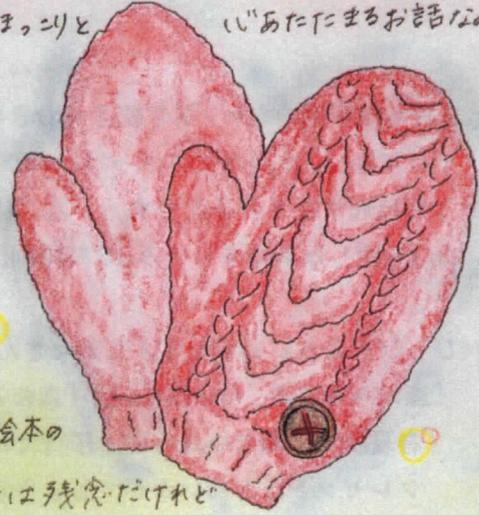
... ところがちびちゃんはあるひみぎのてぶくろを森でなくして

しまいます。そして、きつねがみつけて... その後森の動物

たちが次々に... というお話なのですが、岡田千晶さんの

優しくあたためたいタマの絵とやわらかい語りかけが大人とも

読んでいてほっとしと... いあたためるお話なのです。



そして、
こんなふうにならば、てぶくろも、森で絵本の
よくなるのかしら... と考えると、なくなることは残念だけれど

寒い冬も心がほんわり、そしてくす、と笑いたくなる気がするのです。 : 葉々夷